

マオイストになった娘たち： 西ネパールの村落社会から見た人民戦争

How rural girls became Maoists during the People's War in Western Nepal

山口県立大学国際文化学部教授

山口県立大学大学院国際文化学研究科教授

安野 早己

Hayami Yasuno

Summary

In 2001 four girls from Ludku village of Western Nepal became Maoists and surrendered themselves to government at Jumla three months later. They are 14–15 years old and two of them were married while the other two not yet married but betrothed. Their participation to the Communist Party of Nepal (Maoist) and surrender resulted in their displacement from their homeland and the breakdown of their marriage and betrothal. Their family were attacked by Maosits as repayment and some of them were forced to leave the village.

Their family claimed that the girls were not willingly to join the Communist Party of Nepal (Maoist) but solicited to do so. The party was then underground and had been fighting against the government since 1996. However, the Maoist activity was to some extent attractive to rural youth.

This paper aims to clarify the cause and result of the girls' participation to the Communist Party of Nepal (Maoist) through their narratives. The data were collected at Nepalgunj in 2006 and at Ludku in 2007 and 2008.

Key words: the Communist Party of Nepal (Maoist), Rural Nepali Girls, the People's War, Surrender, Internal Displacement

はじめに

これから述べる事件を社会的にどう把握すべきか、まだはっきりとした展望はない。一般に人類学者が調査対象としてきた、いわゆる伝統的村落社会が国家規模の大きな変動に見舞われ、村を超えた組織と直接に対峙せねばならなくなったときに起こった出来事というべきだろうか。筆者はかつて1983, 1984年の2年間、西ネパールのジウムラ郡ルルク村で、土着のマスト神信仰を研究対象として調査を行った¹。当時ネパールはパンチャヤット制度下であり、政治活動の自由は認められてはいなかったものの秩序は保たれていた。その後、首都カトマンドゥを中心に90年民主化が起こり、政党政治が復活した。地方でも、新たに導入された村落開発委員会（VDC）に各政党員が立候補し選挙で選ばれるようになった。しかしながら、実際には従来からの伝統的リーダー、すなわちネタ（netha）とよばれる地方名望家が政党員としてポストに就くことがほとんどであった²。中央においてはネパリー・ कांग्रेस党（NC）や、統一共産党（UML）による組閣は短命に終わり、政権交代劇が繰り返され

るなか、1996年ルクム・ロールパ郡から武装勢力による反国家闘争が起こった。ネパール共産党毛沢東派（マオイスト、CPN-M）による人民戦争の開始である。マオイストは国家権力と直接に対決する一方、村落社会においては伝統的勢力を暴力的に駆逐し、革命イデオロギーを広めるべく村人を強制的に各種プログラムに動員し、若い青年男女を党員としてリクルートしようとした。もちろん、人民戦争当時マオイストは国家にとって非合法的存在であり、なんびとであれ、警察にマオイストと疑われれば逮捕・拷問が待ち受けていた。村人にとって、マオイストの到来は、「津波」にも「風雲」にも喩えられるような、社会を震撼させる出来事だったのである。

問題の事件は、人民戦争の最中の2001年夏、ルルク村で4人の若い娘たちが一斉に出奔してマオイストになり、数ヶ月後郡行政長官（CDO）—地方レベルにおいて国家権力を代表する—に投降したというものである。この事件は、当事者の肉親を含めて村人には驚きであった。娘達は上位カースト出身であり、経済的に困窮しているとは言い難く、親に対しては従順で

あったからである。「きちんとした家の娘はマオイストにはならない。下位カーストや壊れた家庭の娘がマオイストになる³ことはあっても」というのが当時の村人の通念であった。村にはすでに他村出身の複数の女性マオイストが時折駐在していた⁴。事件から8年後の現在、問題の少女たちは—もはや少女とはいえないが—、結婚して村の外で普通の暮らしを送っている。

筆者はこの事件を発生時に把握したわけではない。人民戦争が終わった2006年夏に初めて、避難先のネパールガンジなど⁵でルルク村の人々に再会してこの事件を知り、その後2007年夏ならびに2008年夏にルルク村を訪れ、限られた範囲ではあるが、当該の家族にインタビューする機会を得た。本稿では、娘たちがどのようにマオイストになったのか、またその帰結、すなわち投降⁶がもたらしたマオイストによる報復は何だったかを村人の語りから再構成する。その作業を通して村人にとってマオイスト人民戦争が持つ意味を検討する事が本稿の目的である。

さらに娘ではなく嫁であるがゆえにマオイストにならざるを得なかった女性の事例をとりあげ、比較してみたい。また当該の4人の少女たちは軍隊に入ったわけではない。フムラ地域の事例で、人民解放軍兵士となり、戦死した女性のケースとも比較してみたい。

女性の武装兵士は、従来のネパール女性の従順で貞淑なイメージを覆すものである。そのためか戦う女性自身の発言はこれまでいくつか紹介されている(Com.Parvati: 2003, 2006, Sapkota: 2006, Onest: 2006 など)。一方、人民戦争下における普通の女性の経験については、まだ十分な実証的研究は少ない。Gautam他(2003)の「男性のいないところで: ネパールの武装闘争の中での女性」や、Sharma他(2004)の「人民戦争のジェンダー次元: 農村女性の経験についての考察」など、わずかである。

1. 背景

村は、約100戸、人口500人のブラーマンの村である。1996年に始まったマオイストによる人民戦争の影響がこの村に及ぶのは1998年ごろからである。まず、当時村落開発委員(VDC)長であったA氏が秘密裏に、ルルク出身のマオイスト地下活動家にアプローチされた。元小学校教員のA氏はジャナ・モルチャ⁷党員で、統一共産党(UML)から後援されて村落開発委員長に立候補して当選していた。A氏は村内でひそかにマオイスト支持者を育成したと思われるが、自身はマオイストに宗旨替えせず、ジャナ・モルチャ党員のまま

であった。マオイストの寄付領収書をもっていたことから、村落開発委員長のまま警察に逮捕され拷問を受けるが、釈放され、のち2年の裁判を経て無罪となる。この間、マオイストは接触してこなかったという。一方、村でRという、評判のよくない20代の若者がマオイストになり、外部からやって来るマオイストに協力するようになる。

2000年頃からカリコット郡出身のマオイストが銃をたずさえて村に頻繁にやってくるようになる。そして一連の武装攻撃が始まる。警察詰め所に向けて発砲したり、地域の有力者の家を略奪するようになる⁸。最初に攻撃されたのは、2000年バイサク月(4-5月)、隣村ハットシジャのPB氏の家である。彼は、ムッキヤ(伝統的首長)であると同時に郡パンチャヤット議長もつとめ、ネパール・ kongress 党員として地域社会に大きな影響力を持っていた。武装マオイストは彼を「封建的搾取者」と批判し、家を略奪、多額の寄付金を請求した。2001年になると、ルルク村で、チャイタ月(3-4月)、郡開発委員(DDC)長でネパール・ kongress 党員のT氏の家が略奪された。この直後、この地域を管轄する警察署は郡庁所在地カラングへ撤退した⁹。マオイストは村へやってくると、家々に食事や寝床の提供を強制し、村落を支配下に置くようになった。アサール月(6-7)月には、かつての村落開発委員会に相当する地区に人民政府(Jana Sarkar)が作られ、カリコット出身の若いマオイスト、ビベックが長(プラムク)となって着任した。

全国的に見れば、2001年には人民戦争にとって大きな転機となる出来事が起こっている。6月の王宮虐殺事件により、亡きビレンドラ国王にかわって弟のギャネンドラ国王が即位した。しかし、この虐殺事件が村で話題になることはなかった。この事件からマオイスト運動は共和制へ向けて大きく舵をきることになる(小倉2007参照)。ネパールの外で起こった「9.11」は、ネパール政府をしてマオイストをテロリストと位置づけることになる。11月26日に国家非常事態が宣言され、マオイスト掃討に初めて国軍が動員されるようになる。

さて、娘たちの出奔が起こったのは、上述のT氏の家が略奪され、人々がマオイストの威力を目の当たりにしたあとである。サウン月(7-8月)に出奔したという人もいるが、アサール月(6-7月)であったという人が多い。娘達の共通点は、ほぼ14-15歳の同年齢で、村内に事務所を置く、ある飲料水供給プロジェクトNGOでときおり一緒に手伝いをしていたという。

4人の名前は、マダン、スルヤ・マヤ、アイナ、ニルマラ（以上仮名）である。ほぼ同じ年ではあるが、一番年長なのがマダンで、その次がアイナ、その次がニルマラ、一番幼いのがスルヤ・マヤである。学歴は、マダン9年生、スルヤ・マヤ6年生、ニルマラ3年生、アイナはゼロとばらつきがあった。前者2名は婚約はしていたが、結婚式はあげておらず、生家にいた。後者2名は既婚であったが、どちらも式のみあげてほとんど実家に住んでいた。

4人のうち、アイナを除いて3人の父親は健在であった。マダンの父P氏はムッキヤ（伝統的首長）であり、ネパール・ kongress 党員であった。スルヤ・マヤの父I氏は政治活動はしないが、裕福であった。P氏とI氏は、マオイストからは「封建的搾取者」とみなされていた。ニルマラの父N氏は貧しい暮らし振りで政治とは無縁であった。アイナの亡父はN氏の弟にあたり、アイナが幼いころ亡くなっていた。

彼女らがマオイストになるには、時おり働いていたNGOが大きな役目を果たした。そこにはK・ニューパネ（以後KNと略す）という、郡庁所在地カラング近くの村出身でジャイシ・ブラーマンの30-32歳の青年が働いていた。彼は結婚して3人の子がいたが、この村に単身赴任していた。ルルク村のブラーマンたちのタル（父系出自集団の名）もニューパネなので、4人の娘達とは兄弟-姉妹のように、互いにダジュ（兄）、バヒニ（妹）と呼び合っていたという。タルが同じということは即、同じ父系出自集団に属するというわけではないが、親近感をもたせるには充分であった。

KNはマオイストのシンパであったと思われる。そして彼が娘達を「唆した」。彼は、村の4人の男性¹⁰と、4人の女性をマオイスト党員にする任務をおびていたらしい。娘たちの出奔があきらかになると彼はルルク村から逃亡した。のちにマオイストという理由で、ネパールガンジで警察に2度にわたって逮捕され、ひどく拷問を受けたという。一度は3ヶ月、一度は6ヶ月、刑務所にいた。現在はインドに行き住んでいるらしい。

4人の娘はふたりずつの組み合わせでとらえられるだろう。「封建的搾取者の娘」と非難されたマダンとスルヤ・マヤのふたりは比較的高学年まで学んでいた。一方、さほど有力者でなく、むしろ貧しいとさえいる家の出身のアイナとニルマラのふたりはまったく学校に行かないか低学年で学校を放棄していた。しかし、マオイスト内での実際の行動は別々で、逃亡する際には、スルヤ・マヤとアイナが一緒になった。マダンと

ニルマラとは別々の時期に異なる状況で逃亡した。

筆者は、スルヤ・マヤとアイナには直接会う機会を得たが、ほかのふたりには会ったことはない。しかし、この事件については会ったことのないマダンのことから記述し始めねばならないと思う。なぜなら、彼女こそ全体の事態を把握し、リーダー役を務めたのではないかと思われるからである。彼女の父親がムッキヤであることも大きな意味を持った。彼女の投降はマオイストからの過酷な復讐を招き、彼女の父親をはじめ一家全員、村外に避難する破目になった。家自体も完全に略奪された。一家はスルケットで7年に及ぶビスタピット（避難民）生活を余儀なくされ、父親がルルク村に帰還できたのは2007年夏であった。

2. 国のために死ぬと書いた娘

P氏の家は、2001年のマンシル月（11-12月）、娘のマダンがマオイストから逃げ出して家へ戻った怒りからマオイストによって略奪された。その経緯を、2007年8月、スルケットから帰還したばかりのP氏から以下のように聞くことができた。

カルティク月（10-11月）、マオイストからわれわれを殺す、殴るといふ知らせがやって来た。われわれは夜、家で眠らなかつた。N氏（後述 p15参照）の家の後ろに、小さい手紙が落としてあった。家に戻って開けてみると、「P氏、あなたは財産を選択するか、命を選択するか」と書かれていた。わたしは妻にこの手紙のことを話さなかつた。

娘たちを降伏させることになった。郡庁所在地カラングでマダンと会った。カルティク月の22日に降伏させて、このマダンとその母方の叔父の家に預けて、わたしは家に戻った。お金はなかつた。家でかき集めて2000~4000ルピーくらいになり、24日頃カラングへ引き返した。マオイストは、叔父の家にやって来て連れ去り、マダンを叩いて殴り、気を失わせた。再びマダンも逃げ出して戻って来た。わたしもスルケットへ行くことになった。マンシル月6日にスルケットへ行き、姉の家に住まわせた。スルケットの空港では、マオイストがヘリコプターを燃やし、煙が立ち上っていた。われわれは一年間、身を潜めて暮らした。ジュムラからやって来たビスタピット（国内避難民）を、どのイスタ・ミトラ（儀礼的友人関係にある者）もマオイストの報復を恐れて置いてくれない。しかし、デハルパタ村出身のあるひとが、（マオイストが）燃やすなら、わたしの家を燃やしてもよい、わたしの家に住

めと言ってくれた。3年間、わたしはそこに住んだ。

わたしがスルケットに行ってから、マオイストはわたしの息子を捕まえ、「おまえの父親を連れて来い、そうでなければおまえを殺す、殴る」と脅した。そこで息子も逃げ出してきた。家で飼っていた家畜は隣人が見てくれた。わたしの家には誰もいない。わたしの家が略奪された日、村中の人をマオイストは殴った。マオイストは家から品を持ち出し、美味しい食事を取り、夜中騒いだ。小麦や粟で運べなかったものは、火を放った。貧しい人にあげればいいものを。水牛を殺して、その首にまたがって、ほら貝を鳴らし、「Pは死んだ」と叫んだ。牝牛、牡牛、水牛、銅製の水差し、何も残さず取って行った。われわれはマンシル月17日までこのことを知らなかった。

カトマンズに行き、少しばかり、(略奪の被害に対し政府から)補償を得た、12万ルピーほど。それは家族の食費に消えた。インドへ行って商売をしたり、お金が足りないので、他のひとの稲刈りをしたりした。田植えや草取りの仕事もしに行った。仕事をして、日当を貰って生活した。日当は60~70ルピーであった。娘たちを学校へ行かせねばならないし、とても費用がかかった。イスタ・ミトラたちが、米をくれたり、着る物をくれたりした。みんな何がしかをくれた。わたしはスルケットにいたが、生活できたのはジュムラのおかげである。というのは息子はジュムラの学校の先生であったから、給料を貰えた。その給料を3等分した。ひとつをジュムラに、ひとつをスルケットに、ひとつを学校に行く子供の費用に。

バイサク月(4-5月)の27日に、マオイストは息子を拉致した。夜、米搗き棒で足を押さえつけて、「おまえの父親を連れて来い」と言った。息子は瀕死状態になった。一ヶ月治療させてもらえなかった。わたしがカトマンズから電話をして、郡庁舎に薬を手配してもらった。

ビスタピットになって仕事をしながら暮らしていたが、NGOのカリタスとBEEグループが58人のビスタピットをジュムラに戻してくれた。2007年サウン月21日に。今、家は困った状況である。布団はないし、ベットもない。糶を入れる木箱もない。何もない。

わたしの家が略奪される時、ルルク村のマオイストはいなかった。ラムラ村のハリ・クリシュナと、ラカ村のチャタンがいた。内々采配を振ったのは、パダン・バンダリと、ナレッシュ・バンダリ¹¹である。彼らのリーダーシップで家は略奪された。

娘のマダンがどのようにマオイストになったかについては、以下の通りである。P氏が開口一番に言ったのはKNが4人の娘をマオイストへ誘ったということであった。

われわれは知らなかった。朝、寝床に手紙が書いて置いてあった。手紙には次のように書いてあった。「わたしは行きます。もう戻りません。国のため、命を捧げました」と書いてあった。どうしたのかとわれわれは心配した。KNが唆した、と手紙を読んで分かった。手紙を見て、娘の母、兄、妹はみな泣き出した。

その日、わたしは議長をつとめる森林関係のNGOの研修があったが、それを放棄して、娘を捜しにいった。マオイストもやって来た。マオイストたちは、「娘を連れ戻そうとするなら、娘の家族や村人に仕返し(カルバイ)をする。村人たちは泣いて、この地から外(ビデシ)へ行くことになる」と言った。娘には会うことが出来なかった。森林関係のNGOの人間も心配して捜してくれた。その日に、妻と息子が捜しに行き娘を見つけた、下流のゴデンガ村で。(ゴデンガ村で説得したが)アイナとニルマラは戻らないという。それでマダンとスルヤ・マヤも戻らないことになった。マダンの母親を追い返した。

マダンの母が会いに行ったとき、(娘たちに付き添って)カルナリという名の、マオイストがいた。それが「連れ戻すなら、連れ戻しなさい」と言った。娘達の意味は、戻ることは出来ないというものであった。当初はなにもマオイストからひどい扱いを受けていないから、戻らないと言うのは当然であろう。

マダンは当時14、15歳であった。ラハルジャ村に与えてはいたが、結婚してはいなかった。4人の娘は結婚してはいなかった¹²。

(マオイストになった)娘は近い村むらに銃を担いでやって来る。村にやってきても会うことはできなかった。わたしは自分の娘は死んでも同然だと振舞っていた。自分が好きな党でもないという、マオイストは立腹していた。

カルティック月1日は、新しい収穫米を食べる日である。カシ(去勢した山羊)を斬り、ダヒ(ヨーグルト)を集め、乳を温めて、自分の家には水牛がいるから、あらゆる種類の食事を用意していた。その日、アタルという党名のマオイストが、2丁の銃を担いで、最初、T氏の家へ、ついで、夕方、われわれの家へやって来た。「食事をだせ」という。「食事は出せない。どこへでも食べに行け」われわれはこの家を燃やしにきた。

これは封建的な(サマンティ)家である。「お前はネパールガンジに中国のITA社製の材料で作った、家を持っている。わたしの家は土で作った小さい家ではないか」と口論した。

家の中にマオイストが座ると、わたしの妻や、息子は立腹した、「なぜ家のなかに連れて来たのか」と。家にはいろんな種類の美味の食事が用意されていた。マオイストは2丁の銃でわたしを狙って、「お前を殺すか、家に火をつけるか。わたし-当該のマオイストはチェトリ・カースト出身-の手から米飯を食べろ」とマオイストが言った。「わたしを日本でもアメリカでも外国に連れていってくれ。そこでなら、お前の手から米飯を食べる。自分の家ではお前の手から米飯を食べない」「しゃべるな。お前の家を壊す。 kongress の娘がマオイスト党に行けば、党の不名誉である。」

彼には食事を与えなかった。われわれも食べなかった。(額につける)ティカも準備していた。食事も作っていた。吉日で、食事を用意していた。マオイストとわたしはひどく口論した。2丁の銃とククリとを、わたしの首に狙い定め、「おまえを殺す」と脅かした。わたしは「お前が何を言っても、怖くない。殺せ」と言って胸を差し出した。

ジュムラのバダリワラ村出身のマオイスト、パダン・バンダリ(前頁参照)がやってきて、なぜ喧嘩するんだ、行けと言って、アタルの手を捕まえて連れていった。

マオイストが行ってしまってから、ティカをつけ、食事をした。夜、眠った。真夜中の12~1時頃だろう、また戸を叩く音がした。われわれにはマオイストがまた戻って来て戸を叩くと思われた。しかし、マオイストが来たのではなく、マオイストになった自分の娘が来ていた。娘たちは来て、「お父さん、お父さん」と呼んでいた。わたしは眠っていた。「おまえの顔は見たくない」と言った。妻が外へ迎えに行った。

娘たちがマオイストになったのは、アサール月のことである。新米(ノアング)を食べるのはカルティック月のことである。5ヶ月くらいは経っていた。戻ってきた日の昼、マオイストのプログラムが学校で行われた。マオイストの男女には、靴、毛布、服などが配給された。しかし、娘たちには与えられなかった。貰えないと分かったら、彼女たちは立腹し、逃げ出したのである。kongressの娘だと言って、わたしの娘と、M村出身の娘には衣類をくれなかったという。

マダンの母は起きて、火をたいて、娘をなかへ呼び入れた。わたしは「顔を見たくない、起きない。こん

な過ちをした犬のような娘」と言って罵詈雑言を浴びせた。マダン(マオイストをやめるには)どうしなければならないか、そのようにするとおっしゃるので、わたしは郡行政長官(CDO)のもとへ行かねばと言った。のちに、マオイストのプログラムが行われる予定だった。われわれの計画は、そのプログラムの途中で逃げて出して、郡行政長官のもとへ行くことであった。スルヤ・マヤには下流の村に行くことが割り当てられた(ので逃げ出すことができなかった)。マダンにはプログラムへ行くことが割り当てられ、逃げるのに成功した。マダン(郡庁所在地カラंगाの母方の叔父のもとへ住まわせた。わたしのもとへ娘が逃げてきたと連絡があった。

カルティック月18日に、わたしは母方の叔父の家からマダンを連れて、アートマサマルパン(atamasamarpan)すなわち投降させに行った。投降するとき、「われわれは過ったことをした、ダミの長髪(ラッタ)を切った。村人に苦しみ(ドゥッカ)を与えた。もうそんなことはしない。サタントラになって生きる」と、マダンたちが言うことを郡庁の役人が記録した。わたしが責任をもって、娘を母方の叔父の家(家)に連れて置いて置いた。

郡行政長官は、娘に「あなたを保護することは出来ない(安全を保障することは出来ない)。あなたはどこへでも、マオイストに見つからないところへ行きなさい」と言った。しかし、どこかへ行くにはお金が必要だ。懐にお金はなかった。わたしはお金を取りにカルティック月23日にルルク村の自宅へ帰った。

またマオイストが母方の叔父の家へやって来て、マダンとスルヤ・マヤを拉致して連れていった。母方の叔父の家から連れ出して、離れたところに連れて行って、ひどく殴った。マダンの父方の叔母の息子のNというマオイストが、そこにおいて、マダンを助けた。殴らせないようにした。Nは自分のもとへ預かって、マダンを再び母方の叔父のもとへ預けた。

マンシル月3日にわたしはルルク村からカラंगाの空港へ行った。娘と会った。わたしは「糞くらえ」と言った。娘は泣いた。もう泣くなと言って、飛行機の切符を買って、スルケットへ送り出した。娘の姉がそこにいる。姉の家に住まわせた。

われわれにとって状況が困難になってきた。マオイストは「命をとるか、財産をとるか」と言ってきた。わたしもルルク村に住むことは出来ずに、スルケットへ行った。7年間、避難民生活を余儀なくされた。

娘は9年生まで学んでいた。スルケットへ行って3

年後に結婚した。絨毯工場で訓練を受けていた。わたしの考えでは、SLCに合格させて、教員にしたかった。言うことを聞かず、スルケットの青年と結婚した。現在、インドにいる。グジャラートというところで、ホテルで働いている、夫はマネージャー、妻はカウンターの仕事をしながら。ひとり息子が生まれ、またもう一人生まれる予定である。

マダンの兄NK(29歳)は、マオイストから暴力を受けて以来、精神的に不安定だとほかのひとから聞かされていた。2008年夏のインタビューは以下の通りである。

わたしはマオイストから大きな暴力を受けた。今も身体に傷跡が残っている。最初、妹のマダンがマオイストになった。マオイストへ行ったことをわれわれは知らなかった。

その前日わたしは水牛の代金を支払いに、ジャーチヤ村に行っていた。夜、そこに泊まった。翌朝、学校に行こうと歩いていた。その途中で、マダンがマオイストになったということを知った。父はNGOの訓練があった。母とわたしは、そのことを放っておかず、(勤務先の)学校へ行かずに、妹を捜しに行った。

8時か9時にルルク村から歩き出した。ダパ村を経て、われわれは、ゴデンガ村の川辺に彼女達の姿を見つけた。ラヌカネ村を回って、そこに辿りついた。われわれがそこに着くまでに、彼女達は眠ってしまっていた。村の誰も、彼女達がいるとは怖がって言わない。泊まっている家へ行った。マオイストのなかに、カルナリというコマンダーがいた。(このカルナリはカリコット出身で、のちに国軍に殺された。)カルナリは木のベットに寝ていた。4人の娘は、床に寝ていた。このカルナリと一時間ばかり議論になった。このカルナリは娘達を戻すことに合意しない。娘達は帰ることに同意しない。

母とわたしは、会った娘たち全員にガリ(悪口・雑言)をした。マダンは「わたしは来てしまった。来たからにはもう戻らない」と言っていた。そんなことを言うには、マオイストが脅かしていた可能性がある。彼女達の顔つきは、良くなかった。恐怖でいっぱい顔つきだった。彼女達の顔つきは怯えたものであった。戻ることを了解しなかった。

わたしとカルナリとは顔を突き合わせて議論した。わたしは、厳しい言葉を吐いた。その日からわたしはマオイストの攻撃対象になったと思う。後にも、マオ

イストと会うたびに口論になった。

家族のなかから誰かがマオイストになれば、なったことを喜ぶ場合もあるかもしれないが、われわれの家族にとっては、ひどく悲しい、良くないこととして受け止められた。マオイストについて、徐々に怒りが積もっていった。ダサイン祭に、ノブラージの娘の事件(安野2008参照)が起こった。その事件で、(マオイストの怒りは)ずっと大きい形をとるようになった。マンシル月の7日まで、われわれはここルルク村に住んだが、以降は住むことができない状況になってしまった。

というのは、カルナリがここにやってきたのである。わたしは自分の家から、同僚のL氏の家に学校へ一緒に行こうと誘いに来ていた。カルナリは、L氏の家の屋根の上にあった。わたしを見ると、カルナリは怒って、殴りかかろうとした。L氏の父が、わたしを助けてくださった。カルナリに向かって、食事の用意ができた、早く行け、早く行けと言って、家の中へ連れて行っただけである。L氏とわたしは学校へ行ったが、学校の教室で生徒に教えられる状態ではなかった。カルナリがいつやって来て、何をするかということばかり頭に浮かんだ。ルルクの村中にマオイストが散在していた。わたしは父の兄の家に行き、食事をとった。そこで寝た。翌日、郡庁所在地カラングへ逃げた。

家では、マオイストが母や家族に、脅しを加えたので、母たちもここに住むことはできなかった。全員カラングへ行った。父は、すでにスルケットへ行ってしまっていた。妹のマダン自身も、投降後スルケットへ行っていた。われわれもスルケットへ行った。

不在となったルルク村の実家ではマオイストが略奪を行った。雌牛、牡牛、水牛、衣類、布、什器、金銀、全部取って行った。穀物もすべて持っていった。家の窓や戸も壊してしまった。

わたしはファグン月(2-3月)1日に、学校へ復職するため、スルケットからジュムラへ戻った。しかし、ジュムラからルルク村へ戻るのは怖くてできなかった。ルルク村に戻れないので、地区の教育委員会に申請書をだし、ジュムラの郡庁所在地の近くで教えられるようにしてほしいと訴えた。しかし、教育委員会は耳を貸さなかった。(マオイストの嫌がらせが原因で郡庁所在地に住む教員は多数いたのである)。

スルケットにいる8-10人の家族をわたしが養わなければならない。だから、教職を捨てるわけにはいかなかった。途方にくれて、チャイタ月1日、わたしはここルルク村に戻ってきた。マオイストたちは折々家

へやってきて、罵詈雑言を浴びせ、立ち去っていった。窓や扉を壊していたのを修理してもよいかという、「直せ」と言った。窓や扉を修理し終えた日、わたしは父の兄の家に行った。食事をしようとした頃、夜だが、3人のマオイストがやってきてわたしを連行した。ふたりが銃を担いでいた。銃を持つひとりが前を、後ろをもうひとりが歩いていた。銃を持たないのは政治を担当する者であった。ひとはゴデンガ村のビスマという者であった。彼らと一緒にいくと、村のはずれに、ルルク村のノブラージなど3人がいた。3人を、わたしより先に、捕まえていたのである。銃を担いだ5人が先に、6人が後になって歩いた。われわれはラハルジャ村へいった。ラハルジャの北の森に一軒ぼつんとあるパネ・サルキの家に連れて行った。そこに寝かせた。家の中、左右に銃を持った人間が寝ていた。われわれはその間にいる。われわれは寝る気にならなかった。明るくなると、わたしを呼んだ。われわれ4人のうち、「マスター（先生）は誰だ、マスター（先生）は誰だ」とわたしの名前が一番、出ていた。彼らの集団のなかで、マスター（先生）に報復するということを知った。彼らの最初のターゲットはわたしだと思った。わたしが呼ばれた。まわりに人民軍がいた。DCMのパダン・バンダリがいた。地域（ジッラ）の書記、ビスマがいた。ラビ・キランがいた。

わたしが呼ばれた。その5、6日前に、ジウムラ・バザールから国軍が（シジャに）やってきていた。国軍は、シジャで、マオイストの3人の娘と一人の青年を殺していた。わたしに、マオイストが言った。「国軍を呼んだのはお前だろう。」わたしは国軍を呼べるような状況にはなかった。「国軍を呼ぶのにどのくらい報奨金（バッタ）を貰ったのか。お前はスパイだろう。どれだけ報奨金を貰ったのか。さあ言え。」「わたしはそんなことはしていない」と言ったところから、彼らはわたしを殴り始めた。ひとは足で蹴りつけた。わたしは知らなかったから答えようがなかった。その後、鼻から血が流れた。「米を搗く棒をもってこい」と言っていた。3本の棒を持ってきた。わたしを寝かせて、その棒を押し付けた。2本の棒が折れた。1本の棒は折れなかった。わたしは気を失った。気を失って、意識を取り戻した。わたしは水を乞うた。「おまえは死ぬのだ。おまえに水は必要ない」とひとりが言った。チャタンというマオイストが水を持って来てやれ、と言って、わたしは水を飲むことができた。「『国軍を呼ぶ仕事、密告する仕事は、NKがやった』と今ナラバハドール・サヒが言った。それはなぜだ。おまえた

ちの間にいがみ合いがあるのか。」ナラバハドールは父から5000ルピーで、屋敷用の土地を買っていた。そのお金を渡すのを遅らせていた。それだけで、われわれの、ナラバハドールに対する怒りやしこりはない。

ナラバハドール・サヒは「そのように彼が言った」と言った。ナラバハドールの妻も来ていた。ナラバハドールの妻も前日、殴られていた。生きのびるために言ったのである。ナラバハドールはビラト開発委員会（VDC）のたくさんの人間の名前を（密告者として）挙げた。ナラバハドールの妻ギマは言った。「お前も、ビラトの人間の誰と誰がいたか彼らが言ってくれ」と。わたしはどんな苦しみ（ドッカ）を被っても、無実のひとに罪を着せることはできない。パダンが言った。「ビマック（正常な意識）が壊れる。もう殴るのはやめろ」と言って、別の部屋につれていって置いた。腕や足が腫れていた。わたしを担いでルルク村へ連れていった。担いで運ぶ途中で、ある村人がわたしを見て、気を失った。そのひとも起こして担いで連れてきた。

町に行って治療することを許されなかった。ここの地元の薬だけを飲んだ。徐々に元気をとり戻した。マオイストからは季節毎の寄付（モウサミ）を要求された。「おまえの母や父を呼び戻すか、それとも寄付をしなければならない」と言われた。モウサミと一般の寄付は別のものである。母や父が戻ってこないで、母や父が食べる分として、穀物を別に出さなければならない。カルティック月には、2、3クイントル（1クイントルは100kg）の米を与えて初めて、わたしは生き延びることができた。給料の5パーセントは与えねばならない。彼らがプログラムを実施する費用や、女性の組織、農民の組織、すべての組織に寄付をしなければならない。全部折々に取りに来て、与えなければならない。

その後、NGOのBEEグループやカリタスの援助で、父や母がスルケットからジウムラへ戻った。

マダンが娘たちのリーダー的役目を果たしていたと思われる。一家は娘の投降を理由に、脅迫され、避難民（ビスタピット）となり、家財も略奪（ガル・ルトネ）された。教職のため村に戻ってきた息子はマオイストによる拉致、暴力や寄付の強制に苦しんだ。拉致の理由は、「国軍を呼んだ」という容疑であった。この嫌疑は全くの濡れ衣で、彼が疑われた理由のひとつに、妹がマオイストになったとき、彼が憤怒からマオイストに向かって暴言をはいたことが根にあると思われる。マオイストになった娘は村落共同体の生活に戻る

ことなく、インドの都市で結婚生活を送っている。

3. 「われわれ娘は他の村へ嫁ぐジャット」

筆者は2007年夏にルルク村でスルヤ・マヤに会うことができた。彼女は妊娠し、結婚相手の男性と実家に戻っているところだった。父親Iは、娘がマオイストになり、投降したことから、マオイストに5万ルピーの高額寄付を要求されたという。また、マオイストの不浄カースト（ダリット）から直接に飲料水を飲まされることになった。後者の直接の原因は、家族が不浄カーストを忌避したこと、すなわち不浄カーストのひとりが使用して洗って戻した食器を、さらに儀礼的に浄化しようとした行為を目撃されたことにある。もっとも、不浄カーストの手からが水を飲まされたのはIだけでなく村人全員である。

I氏の家を訪ね、筆者はI氏と相対して座り、娘のスルヤ・マヤは隣の部屋から答えるという形でインタビューは始まった。娘の説明は以下のようである。

初めに、KNはわれわれの村の4人の男性と、4人の女性をマオイスト黨員にしなければならないと言った。4人の男性とは、…（略）である。マダン、アイナ、ニルマラは（事情を）知っていたが、わたしは知らなかった。マダンが（KNに）スルヤ・マヤも連れていかねばならない、自分達だけなせ行かねばいいのか、と言った。わたしは、そんなマオイストには行かないと言った。KNは「おまえの名前を書いた書類は、党首プラチャンダのところへ行っている。もう行かないわけにはいかない。行かなかったら、父、母を殴る、家を略奪する。ひとりいる兄を殺す。（党に）行かなくては」と言った。

最初の日、下流へ、われわれを隠すために連れていった。ゴデンガ村へ行き、そこからバジュリ村へ連れて行った。われわれのあいだで相談した。兄や父を殺され、家を略奪されたら、どうする。兄、父、母が死ぬより、われわれが死ぬばよい。われわれは他の家へいくジャットである。われわれの間ではそのような相談をしていた。KNはわれわれを脅した。「おまえの名前はもう（党中央部へ）行っている。お前が党に行かなかったら、すべてぶち壊しだ。すぐに行かなければならない。行かないなら、父母を殺す。家を略奪する」と、ただそれだけと言った。

まだ村にいるとき、（マオイストは）われわれにビスケットをくれたこともある。彼らと少し仲間意識もあった。われわれの学校で、マオイストは踊りを踊っ

た。その踊りを見ると、行こう行こうという気になった。ビスケットを食べ、頻繁に会い、ひとつの思いになった。ビスケットを食べたのと、踊りを見たことから、行こう行こうという気になった。

マオイストたちはよくない。他の人の家を略奪する。他のひとを殴る。家々に行き、食事をする。良くない。「おまえたち4人は一つ所に置く。別々に行く必要はない。文化活動チームに行かせる。そこで踊るのは楽しい。」そんな話をした。「家々に行き食事をする必要はない。一つの部屋に連れていく。行こう」といって誘った。

実際には、われわれはまったく一緒ではなかった。別々にされた。われわれはひとりになると、泣いた。彼らの党に入るときには、うまい話をする。マダンたちが話をした。わたしは他のひとの家に行き食事をする、と吐いた。わたしはマオイストたちから一番の泣き虫だと言われていた。

アイナは軍隊に、マダンとニルマラは踊りに、スルヤ・マヤは政治に、つまり、村の女達を勧誘するという役割分担であった。そのようにすると言っていたが、実行はしなかった。（シジャ川に沿って）下流のナラコットから最上流のボタまでがわれわれの（守備）範囲であった。活動したのは2ヶ月のみ。後に、上流のピラトあたりに戻ってきた。実家（の村）に来たら、父が会いにきた。そして、投降することになった。

それはアソジ月（9-10月）の13日、ノブラージの娘をめぐる紛争がおこったときである。その（喧嘩になった）とき、村外れの火葬場の草地に父が会いに来た。われわれを連れて行った。村の人間は、他の村出身のマオイストは殴ったが、われわれには何もなかった。ある家にわれわれを隠してくれた。夜になって、父がこちら（実家）に連れてきた。後日早朝、ジウムラへ行った。ここから、投降するために、アイナとわたしだけがジウムラへ行った。（ニルマラとマダンは党を離れないと言った。）朝早く行き、峠の途中で夜が明けてきた。その日、父はわたしを郡庁舎に連れて行って、投降させた。

「われわれをマオイストは無理やり党に連れて行った。われわれにその気はなかった。投降して、正常な人間になって生きる考えである」と言った。郡行政長官（CDO）は自分でいろいろと質問した。誰が連れていったのか、何をしたのか、など。「母や父を殺す、家に火をつける、と言われてわれわれは行った。恐怖で行ったのである。われわれは自分から行ったのではない」と答えた。

のち、父はわたしを飛行機に乗せて、ネパールガンジに行かせた。4年間、ラジャプールに住んだ。そのマオイストはわたしの過去を知らなかった。その女性達と同じ格好をして、ラルプラサッド叔父（母の姉の夫）の娘同然にして暮らした。わたしの容姿もあう。なぜ「姉」のわたしが7年生で、「妹」のラルプラサッドの娘が10年生で学ぶのか、とカリコットのマオイストが訊いたことがあった。ラルプラサッド叔父は、「わたしの娘は体が弱い。試験のとき病気になったりした」と答えた。「あなたは娘になぜ薬を飲ませないのか」とマオイストはなおも訊いていた。ラルプラサッド叔父は大変助けてくれた。（のちに、スルヤ・マヤを同じブラマン・カーストの男性と結婚させてくれた。）

ネパールガンジへ行く航空運賃は、父が出してくれた。政府（サルカル）が出してくれるわけがない。ある人々はサルカルから貰ったかもしれないが、わたしは申請しなかった。

いつもマダンとわたしは、封建的支配者の娘と言われた。「彼らの近親も封建的支配者だ、彼らの子孫も封建的支配者だ、彼女たちは封建的支配者の娘だ、彼女たちはマオイストには留まらないだろう、彼らはマオイストをひどく軽蔑していた、だからそのかわり連れてきた。われわれの仕事は完成した。彼の威信（イジェット）を壊すために娘を連れてきた。おまえたちは来ても、党で何か仕事をしそうには見えない」と言われた。わたしたちは母や父の威信をなくすためにだけ、連れていかれたのである。

一年後2007年の夏、父親のI氏にあらためてインタビューし、出奔を知った日のことから聞くことができた。I氏は自ら娘を探しに行ったが、連れ戻すことはできなかったと次のようにいう。

そのとき、わたしは水牛の放牧小屋にいた。アサールの13日¹³のことである。KNに脅されて娘のスルヤ・マヤはマオイストに行った。娘は事前にわたしには何も言わなかった。13日の夜、4人の娘がルルクからマオイストに行ったという知らせが家から峠の放牧地にいるわたしの元へ届いた。わたしは正気を保つことができなかった。（いつものように）沐浴したり、食事をする気になれなかった。「じいさん、人は死ぬときも食べるのはやめない（食べなさい）。沐浴しなさい」と友人が言った。夕方、放牧地から家に戻った。放牧小屋の友人には、「2～3日は小屋に来ることはでき

ない。娘をさがすため」と言った。

ルルクから村むらで尋ねながら、ナラコット村まで行った。イスタ・ミトラ（儀礼的友人関係）にあたるDという人物と会った。Dが、「あなたは幸せそうではない。あなたの顔は死にそうである。どうしたのか。食事をしているようには見えない」と言って、Dの家に呼んで食事を出し、泊めてくれた。Dが「プラチャンダ¹⁴、バムラムなどみんなマオイストになっている。60000人がマオイストに行っているのだから、あなたの娘が行ったところで、何が問題だろう（なんでもない）」と言ってなぐさめた。

村むらで尋ねて、ラムカネワラ村に来た。ラヌカネワラ村の人間は、スルヤ・マヤを知っていた。その人物はスルヤ・マヤをみかけて「お前の家はどこか」と尋ねたという。スルヤ・マヤは「われわれの家はカリコットである」と答えたという。「おまえはルルク村のIの娘である。おまえはわたしを騙すのか」というと、スルヤ・マヤはその人物に黙るよう命じたという。

歩いている彼らに追いついた。ふたりはカリコットの娘、4人はルルクの娘であった。わたしは言った、「4人とも戻らねば」と。「われわれは戻らない。あなたの家が略奪されてもよければ、われわれに戻れと言いなさい」。「おまえは自分の意思で行ったのか。強制されて行ったのか。答えてくれ」「われわれは自分の意思で来たのである」と、娘は説得に耳を貸さないので、放り出した。わたしは家に戻った。

カルティック月11日¹⁵、（人民政府の長）ピベックが人民軍を率いてルルク村にやってきた。人民軍のあとを、アイナとスルヤマヤがやってきた。彼女らをつまえて連れてきて、4～5日、家に置いた。マオイスト達は捜しに来た。「いない」と言った。ここから夜出かけて、峠の途中で夜が明けた。ジウムラに着いて、CDOのところまで降伏した。アチャルヤワラの、娘の姉の家に住ませた。彼女をネパールガンジに行かせのお金が必要なので、お金を取りに戻った。

マダンは母方の叔父の家に行った。沐浴しにいったところで、マオイストに見つかった。マオイストが連れて行った。マダンが言った。「スルヤ・マヤもここにいる」と。その後、マオイストは娘の姉の家からスルヤ・マヤも連れて行った。マダンが言わなければ、知らなかったものを。

マオイストたちはスルヤ・マヤをカルル・ワラに連れて行った。そこで殴り、服、プリ、ブラギ、すべてを取った。ニクンという、娘HAの夫の父方の叔母の息子がいる。それが服などをくれて、アチャルヤワラ

の娘の家に送り届けた。ひどく、殴り、苦しめていた。娘の家で沐浴して、きれいにしておいていた。わたしはここから行って、娘を連れてスルケットへいき、ネパールガンジへ行った。ネパールガンジからラジャプールへ行き、ラルプラサッドの家に連れて行って置いた。

アイナとスルヤ・マヤと一緒に投降した。投降するとき、わたしだけが付き添った。CDOが質問した。「お前は自分で行ったのか、脅かされていったのか。」「われわれにはその意思はなかった。無理やりで連れて行った。牝牛を食べる。その党は好きではない。ダルマを信奉していない。無理やり連れて行ったのである」と、娘たちは言った。書類を書いて、「もうこの党に関わることはない」と署名をした。

娘たちには武器は与えられていなかった。学校へ行くようなドレスも着ていなかった。学業証明書を送って、5年間、ラルプラサッドの家に住み、学校に通った。良い青年が見つかったら、結婚させてくれと頼んでいた。バフンの青年が見つかったので、結婚させた。持参金などはラルプラサッドが自分で出してくれた。ラルプラサッドの妻と、スルヤ・マヤの母は、姉妹である。今はスルヤ・マヤに息子も生まれている。

スルヤ・マヤを投降させたことで一家はさまざまな報復を受けた。まず、スルヤ・マヤの弟がマオイストに殴られた。ラハルジャ村のJとその弟、スルヤ・マヤの弟Gが、ダイレクからジウムラへ帰る途中歩いていると、マオイストに待ち伏せされて死ぬほど殴られた。彼ら3人はカトマンドゥで学ぶ学生である。スルヤ・マヤはこのJという青年に将来の花嫁として与えられていた。マオイストのひとりアンガットが、このJを見知っていて襲ったのである。このときGの友達で、サガットというマオイストが、「もうよし、学生だ、放してやれ」と言ってくれた。(サガットはのちに自殺した。サガットとGとは、学校で一緒に学んだ仲であった。)

次いで、10クイントルの米をマオイストから要求された。スルヤ・マヤを投降させたことのかわりと、もうひとつはカミを軽蔑したことのかわりである。米を搗くひとを9人雇って、米を搗いた。ぬかを取った良質の米である。結局、要求の半分の5クイントルを与えた。マオイストたちは夜やってきて、大きな袋を担げるだけ担いでもって行った。Iの妻は戸口に立ちつくしていた。マオイストは銃身で彼女の足を殴った。どうであれ、生きていかねばならない。口出しはでき

なかった。

また、マオイストは爆弾を持って来て、Iの家のなかの物置(ダハラ)に置いていった。義姉が、取りだして動かしたが、爆発しなかった。カトマンズにいる息子Gに、こんな爆弾があると手紙を書いたところ、家から出して島にもっていき、穴を掘って、火をつけろと、Gが言ってきた。実際のところ、Iは2-3回動かした。爆発するということが知らなかったのである。のちにマオイストがやって来て自分で取り出して持ち去った。

バーダルというマオイストと、パダン・バンダリというマオイストのふたりが家にやってきた。娘のスルヤ・マヤはラジャプールに送り出していた。「Iというのはおまえか」「わたしだ、家もこれだ」「さて、あなたにひとつ言いたい。10ラックお金を与えるか、今日から7日以内に娘を連れ戻すか。家に火をつけるか。3つ爆弾を持ってきてここに置こうか。おまえの手足を斬るか」と、言うたびにククリ(刀)を抜いて、斬りつけるまねをした。わたしは答えた。「娘はわたしのもとにはいない。生まれたら死ななければならぬ。斬って殺すなら殺せ。爆弾を破裂させて殺すなら殺せ。なんでもしたいようにしろ。わたしムッキヤでも、警官でもない。どうする」と、4-5回そんな話をした。「さて、一度あなたはサザエ(科罰)をくらいますか」ということになった。

マオイストたちはIを隣村のハットシジャのKの家に呼び出した。Iは水牛の乳しぼりを終えてから行くと答え、水田に隠れた。すぐに連れて来いと言われた隣人が「どこへ行ったのか。どこから連れてくるのか」と言うと、マオイストは立ち去った。朝明るくなる前に、Iはジャングルへ行った。夜、家に来る。夜、ジャングルに行く、ということを一週間続けた。その後、Iはカトマンドゥへ行った。マオイストもどこかへ行った。この件は終わった。

ある日、3人のマオイストがIの家へ来て食事をした。ふたりのドム(不浄カースト)とひとりのパバイ(チェトリ)は器を洗った。その後、Iの義姉が自分で洗って、チョコウヌ(浄化)をした。家の近くの間が、浄化したのを見た。そのことをマオイストに知らせた。スルヤ・マヤを降伏させたことも関係して次のような事件が起こった。

ネパール暦2061年プス月(12-1月)8日のことである。不浄カースト(カミ、サルキ、ダマイ)のマオイストが、ラハルジャ村とルルク村で、自分たちの手

から多くの浄カースト（バマン、タクリ、チュトリ）の人々に水を飲ませた。

まず、前夜9時過ぎ、Iとムッキヤの未亡人Kがマオイストに連行されて隣村のある家で殴打された。本来なら、チョカウネをした義姉が呼び出されるはずであったが、彼女はルルク村のマオイストDRの叔母に当たるので、DRが彼女をかばい、その代わりにIが呼び出されたのである。一方、未亡人Kは、家に不浄カーストが来たとき敷物を勧めなかったというのが直接の原因で呼び出されたのである。

ひとりのドムが「牛の乳を搾った器に入れた水を与えない、パーマン」とIを罵り、Iは四方から木の棒で殴られ、鼻血を流した。痛みにIは「ああ死ぬ」と叫んだが、殴打はやまなかった。未亡人のKも手を捕まえられて、首、肩、腿を殴られた。ドムは「我々が行ったら破れた布をだし、自分の兄が来たら羊毛の敷物をだす」と罵った。それだけでなく、Kの亡夫、父や兄が有力な政治家であることも殴られる理由であった。

翌朝、兩人とも下流のロカエワラ村のカミ（不浄カースト）の家に連行された。お茶を出されたが、「夜中殴られて口の中が血だらけだ。沐浴しないかぎり、おまえたちダリットの手からは飲まない」とIは答えた。Kも「飲まない」と答えた。ドムたちがたくさん集まる中、ルルク村のマオイストDRが電池の炭素を取り出して油と混ぜ、二人の顔に黒く塗りつけた。その後、ダマイが不意にその手で二人に水を飲ませた。そして不浄カーストのマオイストたちは、黒い顔の二人を間にはさみ、「ダリットを解放せよ、万歳、パーマンの炊飯（習慣）をなくせ」と叫びながら、上流に村へと行進した。

一行はラハルジャ村に着くと、老若男女の村人全員を集めた。そしてIとKとは、「われわれチュワチュット（浄化）をひどくしたので、ドウッカ（苦しみ）を得た。もうあなた方はチュワチュットをしないでくれ」というスピーチをさせられた。村人全員が水を飲まされた。ダマイがダラから水を汲んできて飲ませ、飲み終えたひとには、大工カーストのダナという人物（当時の人民政府の長）が額にティカをつけた。ためらう人も多かったが、「飲まない」といえば殴られるので、やむを得ず飲んだ。飲んだふりをして水を捨てた者はまた飲まされた。ルルク村でも同様のことが繰り返された。

その夕方、水を飲んだ者は食事をしなかった。夜は空腹のまま過ごし、翌日の朝、川で沐浴して、油、麦の粒、小麦の粒と牛糞を食べ、さらに舌を7回金銀で

触れて浄化した。男性はジャナイ（聖紐）を取りかえた。その後、ようやく食事をした。

スルヤ・マヤの姉HA（40歳）は、マオイストから逃げ出したスルヤ・マヤを匿うことになった。しかし、マオイストに見つかり、スルヤ・マヤはひどい報復を受けた。以下はそのいきさつである。

（わたしは遠く離れた村に嫁いできているので、事情はよく知らないが）KNが4人の娘を誘惑した。最初、マダンを誘い、あとでマダンが他の娘を誘った。スルヤ・マヤがマオイストに行き、3日後、父は連れ返しに行った。「戻らない」とスルヤが言うので、父は泣きながら引き返してきた。

3ヶ月後、父はまた、スルヤ・マヤを連れてここに来た。スルヤ・マヤを別の村のイスタ・ミトラの元へ置こうとしたが、置いてくれなかった。わたしの家に連れてきた。夫の兄の家にマダンが住んだ。わたしの家にはスルヤ・マヤが住んだ。

この村のマオイストが、ジュムラ・ジッラのマオイスト幹部に、娘を隠しているということを話した。ニクンというマオイストがわれわれの家にやってきて、「マオイストに行ったスルヤ・マヤは、おまえの家にいるか」と尋ねた。「われわれの家にはいるが、今はバザールにでかけている」と嘘を言った。ニクンは自分で家の中に入ってきて、木の箱（カット）の陰にかくれていたスルヤ・マヤを捕まえて、マダンとスルヤ・マヤを、チョウダビスの村、ウルトゥへ連れて行った。夫の兄のジャヤクリシュナはバンジ（姪）を、置いている、夫のビシュナ・アチャルヤはサリ（妻の妹）を置いている（と言われた）。

マオイストは二人来た、われわれの家に。「あなたのサリをどこに置いているか」と尋ねた。「サリはここにいない。わたしの家にはいる。しかし、今、わたしの家にはいない」と言うと、ふたりは家の中へ入った。カットの陰に隠れているのを見つけ、捕まえて、外に連れ出した。上のジャヤクリシュナの家からもマダンを連れ出して、一緒に連行した。わたしは泣いた。みんな泣いた。連れていかなくてと手を合わせた。マオイストは意に介さなかった。連れて行ってしまった。

そのマオイストとはカラル・ワラのひとで、わたしの知っているひとだった。その名前はニクンである。「われわれは（彼女を）連れて行っても、何もしない。事務所のあるところに連れて行って、質問して送り返

す」と言った。われわれは、連行される妹の後をついて行った。ラジコットまでわれわれは行った。「もう帰りなさい。われわれはウルトゥまで連れていく」とマオイストは言った。

わたしはラジコットから泣きながら家に戻った。父に連絡した。「(妹を) 家においていたがマオイストが連れて行ってしまった」と。父からは、「(娘は) 始めにもマオイストに行った。今度も行かせなさい」という知らせが来た。

マオイストたちはウルトゥ村に連れていくと、マダンとスルヤ・マヤをひどく殴った。ウルトゥではマオイストの会議が開かれた。「家にサリを置きながら、サリはいないと言う者には、腕一本、足一本は斬らなくてはならない」と相談した。「わたしのビナ(義兄)がどんな誤まりをしたというの。わたしの義兄の手足を斬る理由はどこにある」とスルヤ・マヤはマオイストに言った。スルヤ・マヤの鼻を殴ったので、フリ(鼻飾り)が取れた。首にかけていたポテユ(首飾り)がちぎれとんだ。腕や脚をひどく殴った。

ひとり、カラル・ワラのニクンは、わたしの妹がそれほどひどく殴られるのを見てかわいそうになった。ビシュナにジャリマナ(罰金)をするな、寄付も請求するな、何もするなと言って、そのようにしてくれた。家の中に隠しながら外に向かってはいないと言ったことに対し、20000ルピーの罰金を科すという決定になっていた。自分の父方の叔母(ププ)の息子なので、腕や脚を斬るな、20000ルピーのジャリマナも科すな、何もしないということにしてくれた。

(マオイストたちは妹を)ウルトゥからデパル、ガジェンコット、その後カラル・ワラと殴りながら連行した。ニクンは妹に知恵を授けた。「もうおまえの身体は青いあざだらけだ、殴られて。こうやって生き延びろ。狂人のように振舞って、人の歩く道のそばに横たわっていなさい」。そう言われてスルヤ・マヤもそのようにした。食事もせず、水も飲んでいなかった。18～19回分の食事をしていなかった。顔も洗っていなかった。道のそばに横たわっていると、マオイストがやってきて、スルヤ・マヤをあちこち転がしてみた。「もうこれは死ぬ。こんなになったら治療してもどうにもならない。党中央委員ほど重要人物でもない。置いて行こう」と、他のプログラムへと去って行った。

マダンをウルトゥに置いた。スルヤ・マヤをカッラに置いた。カラル・ワラのニクンは、妹に自分の妻の破れたドティヤチョリ(ブラウス)を与え、髪を見だし、狂人のようにしていけと言った。狂人のようにす

ればマオイストも気づくことはない、警察もなにもしないと知恵を授けた。

(妹が)家に帰り着くと、顔つきは見たこともないほどであった。顔は洗ってないし、髪は梳かしていない。9-10日間食事もしていない。ひどく殴られ、村むらを引きまわされたことをすべてわたしに話した。

着ていた服は脱がせて捨てた。温かい湯でからだを洗い、新しい服を着せた。クルタ、スルワールを夫が作ってやった。わたしの家に来たことを父に知らせた。「早く来てください」と。

カラル・ワラのニクンは、ウルトゥからマダンをアチャルヤワラに送り届けた。父はシジャから来た。飛行機で送り出してスルヤ・マヤをラジャプールのラルブラサッド(妻同士が姉妹)の家に置いた。

父は、ラルブラサッドと自分のサリ(妻の妹)に、スルヤ・マヤを嫁に乞うひとがあったら、結婚させてやってくれと頼んだ。あるバーマンの青年が乞いにやってきたので、持参金を持たせてそれに嫁がせた。その後、学校は辞めた。彼女の夫は、(店舗を構えず)行商をしている。去年カルティック月にスルヤ・マヤは息子を産んだ。

スルヤ・マヤは7年生まで学んでいる。家族みんな、マオイストに行ったことを批難している。のち、父は、娘を逃がして降伏させたと言って、マオイストに殴られ、煤を顔に塗られ、拉致され、2-3クインタルの米を取られた。ひどく苦痛を与えられた、スルヤ・マヤのために。家でマオイストに食事を与える場合も、他の家の2倍をあてがわれた。

4. 「母のもとへ帰らせてくれと頼んだ」

アイナとのインタビューは、2006年9月、コールプールの「姉」の家で以下のように行われた。そこはかつての彼女の避難先であり、結婚まで暮らした場所でもあった。アイナは婚家のバクタワラから実家のルルク村に戻ってきてすぐ、マオイストになるべく出奔したのであった。

初めに何も相談はなかった。マダンとスルヤ・マヤは相談していただろう。わたしとニルマラとの相談はなかった。われわれの間で何も相談はなかった。われわれの村から各家からひとり、カリコットの大会に行くという話があった。村のひとがみんないくのだから、われわれも行った。KNという男-のちにマオイストになった-が、マダンたちを誘った。マオイストの幹部のカルナリというのが、われわれに言った、「カリ

コットの大会に行かねばならない」と。そのカルナリはのちに軍隊に殺された。「カリコットで文化プログラムがある。明日、お前たちを行かせる」と言った。村の老若、大人も子供も行った。われわれが行ったところで、何も問題はないと思って行った。大会に行き、大会は終了した。

マオイストたちは自分たちのあいだで相談して、「彼女たち4人をここに置かねばならない。彼女はT氏の家の味方をする人間である。彼女を置かなければならない。他の人間は送り返せ」と言った。

(家に帰してもらえず)何日もわれわれは病気のようだった。病気になったら、彼らも放してくれるだろうと思った。しかし、放してくれなかった。1ヶ月半のあいだ、4人は離れ離れに暮らした。ある者はカリコットへ、ある者はジュムラへ送られた。4人を同じ場所に置くと、相談をし、逃亡し、泣くので、別々の場所へやらされた。「おまえたち、ちゃんと生活し、きちんと仕事をしろ、そうでなければ、銃で撃ち殺す。おまえたちは、マオイストを軽蔑する家の人間である」と言われて泣きだけだった。何日も食わずに過ごした。夜な夜な歩く。家から行ったときは太っていたが、そこに行ったら骨だけになった。わたしはマオイストに請願した。「わたしの家には人手がない。母一人、妹一人。わたしを放してください。」「母一人、妹一人という人間はたくさん来ている。行くことは出来ない。」

われわれの他にも娘達はいた。われわれとは親しくしなかった。別々に行動していた。仕事も別々だった。われわれはいつ逃げようかという気だったが、彼女たちはそんな気はなかった。彼女たちの考えは、いつサツタ(政権)を取るかということだった。

食事をするために、どんな家に送られようともそこへ行かねばならなかった。カミ、ダマイ、なんであれ。わたしは知った人の家では食べなかった。カミもわれわれに罵詈雑言を浴びせた、「バマンの娘がなぜマオイストに行ったのか、食事はやらない」と。われわれは一度は郡庁所在地カラングにきたこともある。他のときには、われわれの村の近く、ルルク村、ハットシジャ村、シンパティ村にきた。ブラーマンの家、カミの家に送られた。自分が知っているところだから、ひどく恥かしかった。

停戦(7月)になったとき、ジュムラ・バザールの近くで大会があった。そこへわれわれ全員が行った。マダンとニルマラもそこにきた。そこで再会した。

われわれはたいいシジャにいた。シジャで暮らしていた。われわれを(実家へ)行かしてはくれなかつ

た。自分の家には泊まらなかった。ほかのひとの家に住んでいた。1ヶ月半、母に会うことを許されなかった。母は泣いて泣いた。わたしも泣いた。遠くからわたしを見かけると、「帰って来い、帰って来い」と叫んだ。

アソジ月、ダサインの頃、われわれはルルク村へやってきた。ルルク村のノブラーズの娘をラハルジャ村の男のもとへやろうとして、マオイストたちと喧嘩になった。われわれはカリコット出身のマオイストに連れられていた。われわれは、他のマオイストのように、「娘を売って食べることはできない」とは言うことが出来なかった(安野2008参照)。マダンはマオイストと一緒に立ち去った。

喧嘩になったとき、わたしとスルヤ・マヤは逃げ出した。ニルマラは逃げる事が出来なかった。8-9日間、われわれは家の中に潜んでいた。村人が投石して、3人のマオイストを殺した¹⁶。そして、警察と国軍がヘリコプターでやって来た。わたしが隠れているということをニルマラは知らなかった。

4-5日隠れて、朝4時、破れた服を着て、スルヤ・マヤとわたし、スルヤ・マヤの父Iはルルク村からカラングへ向かった。他の人に知られないように、顔を隠して。朝の11時にカラングへ着いた。Iは、シンカダの近くで「おまえはどこへでも行きなさい」とわたしを放り出して、自分の娘だけを連れて去った。わたしはとても困った。頼れる人間は誰もいなかった。どこに泊まるか?どこにもマオイストがいた。マオイストがわたしを見つけたら、殴り、殺すだろう。行くところがない。ひとりの女性に出会った。わたしは泣いていた。その人が言った。「なぜ泣くの。あんたの村はどこ?」わたしは嘘を言った。「わたしは塩をもらいに来たが、道が分からない。ハリ姉の家はどこでしょう」。ハリは亡父の姉の娘であった。わたしは、教えられた道をたどってハリの家へ行った。ハリが言った。「マオイストがたくさんあちこちにいる。みつけたら、おまえを殺す。わたしたちを殺す。おまえの命もなくなる。われわれの命もなくなる」と。わたしはどこにも行くところがなかったので、ハリ姉の夫はバクヴァン(神様)のようにみえた。「2日間われわれの家に置いたところで、何が起ころう。われわれの家に置いておけ」と言って置いて下さった。彼らの家に泊まった。家から外に行くことを許されなかった。ハリ姉の家の壁が雨で崩れていた。その修理工事をする人夫たちが家に来ていた。彼らは多少気づいていたかもしれない。姉は言っていた、「(この娘は)マオイストに行つ

て、マオイストが気に入らなかった」と。

投降するため、翌日、マダン、スルヤ・マヤとわたし3人一緒になった。郡行政長官(CDO)に投降するために行った。われわれの村の人々が彼女たちはマオイストにいくような人間ではない、無理やり連れていかれたのだと言った。われわれが2ヶ月ほど家の外に行き、とても瘠せて、苦勞したということを知った。郡行政長官は、投降する者に、500ルピー下さった。「おまえたち、それで食べなさい、泊まりなさい」と言った。われわれは言った「ジムラには住まない。タライ(下方)に行く」と。郡行政長官の質問「タライに誰がいるか」。「タライにはわれわれの姉がいる、兄がいる」「それなら、他にお金を探していきなさい」。500ルピーでは足りない。マオイストは誰が投降したか知っているし、郡行政長官がお金を渡したらいいことも承知している、再び捕まえにくる、という話を役所で聞いた。

またわたしはハリ姉のもとへ行った。姉はまた恐怖に襲われた。姉は言った。「お前は投降しなければ良かった。マオイストが連れまわしていても、どうにもならなかったはず。こうなったら、われわれは困ったことになった。家が壊れて修理代がかかるときでなければ、おまえに援助できるけれど。他人の汚れた食器を洗ってでも生活しなさい。」

わたしは、ある日、もうひとりの従姉の家に出かけた。そして、ニルマラがカラंगाへきたという知らせを受けた。わたしはニルマラに会いたいと思った。彼女も投降をした。500ルピーを手にした。ニルマラと一緒に、他の村出身の娘も投降した。ニルマラと、その娘、他の男達はジャングルのなかを逃げて、カラंगा・バザールにやって来たのである。

マダン、スルヤ・マヤが泊まっている家に、マオイストがやって来た。マオイストが来たとき、マダンは隠れていた。マオイストは隠れている彼女を見つけた。マダンは言った、「自分だけではない。スルヤ・マヤも下の家に隠れている」と。マオイストは、マダンとスルヤ・マヤを捕まえて上流へ連れていき、ひどく拷問した。ひどく叩かれた。田んぼで堆肥を担がせた。そこへ国軍のパトロールがやってきた。マオイストは逃げだした。マダンは髪を乱し、田にいた牛を見張っているかのように振舞った。国軍は、これはマオイストではないと言って、なにもしなかった。マダンは殺される覚悟だった。軍隊は「マオイストはどこへ行った」と訊いた。マダンは馬鹿のように振舞った。ことばをしゃべらず、手で示した。国軍は「馬鹿と話して

も無駄だ」と行ってしまった。スルヤ・マヤにも4日間、堆肥を担がせた。マダンは逃げ出した。ニルマラにも彼女の義兄が航空券を買ってくれて、ネパールガンジに送りだした。

(こちらに来るのに) お金が足りなかった。ハリ姉が500ルピー下さった。足りなかった。母もカラंगाに来ていた。母はお米を持ってきていた。お米を売って、ようやく航空運賃に足りた。空港には人がたくさん並んでいたが、ラハルジャ村のある人物JAがすぐに切符を手配してくれた。他のひとは並んでいたが、わたしはすぐに切符を入手できた。

カル姉の家に1年間住んだ。コールプールに来て、姉や義兄にひどくお世話になった。どこかにいかねばならない。どこへ行こうと探して、結婚相手としてタルーの男性に出会った。その人の家は近かった。近くで知っていたから、嫁に行ったのであって、安寧はない。結婚式はあげていない。

最初は、あるインド人との結婚話があった。しかし、義兄が知って行くことを許さなかった。はじめにわたしはジムラで結婚していたからである。

タルーの夫はその前に結婚していた。その妻は首を吊って死んでいた。その妻から1男1女がいる。わたしもひどくぶった。夫は酒を飲む。飲むとぶつのでわたしは苦勞している。一度、わたしをひどくぶったので、裸同然で逃げ出して姉の家へきた。姉が話を聞いて、警察を呼んで夫を捕まえてもらった。そして、これからはしないという誓約書を書かせた。

(一方で)ニルマラは幸福に暮らしている。ウバダヤ・ブラーマン(アチャルヤ)と結婚し、インドで勤めている。新しい家を建て、舅、姑はいない。

マオイストになっても何の仕事もしていない。村を回り、食事をするだけ。あるときラハルジャ村のカミの家に、われわれの食事の順番があてられた。われわれは一軒のカミの家に食べに行った。そのカミはわれわれを知っていた。バーマンの娘だと言って、「わたしが、マル・チャーマルをバーマンの家に届けるから、そこで食べなさい、わたしたちの家では食べないでくれ」、と手をあわせて頼んだ。そのことをマオイストが知って、そんなことをするなと脅した。

一軒のサルキの家でマダンは食事をしかけた。その家では牛の肉をぶら下げていた。マダンが入るところに、その血がしたたった。

そうしたカミの家では、ロティを食べようという気になり、米飯を食べるのは嫌になった。

カミのなかには怒って食事を出さない人もいた。な

かには、食事をだして、自分は外へ行く人もいた。われわれを見ないように。そこの人たちは全員罵詈雑言を浴びせた。お前来るな、来るな、と言って。

5. 「妹の逃亡を助けなかった」

ニルマラの兄Nは妹がマオイストになったことに驚いたが、反対はしなかった。その事情は以下のとおりである。

4人の娘について、始めどうだったか何も知らなかった。わたしはカリコットで仕事（アーユルヴェーダ医師）をしていた。ルルク村の4人の娘がマオイストに行ったということは、カリコットで知った。その後、家に戻った。どうして、どうやって行ったのかと、家に戻った。家には、父、母、妻がいた。

どうしたのかというと、飲料水供給NGOで仕事をするガイラ村のKNという者が、4人の娘に、踊り、歌、文化チーム、文化プログラムに入らせる、後で、T氏の息子L、友人のVやわたしの3人もこの文化チームに来る、一緒に仕事をする、娘達をだました。昔からわれわれ3人は、踊り、歌、文化プログラムをやってきた。それを利用して、マオイストは娘達に嘘を言ったのである。4人の妹達にどんな考えがあったかという、Lたちが来るなら、自分たちにもいいことだと考えた。その後、4人は地下活動家になった。KNは、われわれ3人はマオイストだと言ったらしいが、われわれ自身はマオイストになったことはない。のち、KNは逃亡した。

ネパール暦2058年（2001年）には、マオイストとわれわれ村人の紛争があった。その紛争のとき、マオイストのグループに、ニルマラ、スルヤ・マヤ、アイナが来ていた。3人は紛争に巻き込まれた。ほかのマオイストは村人に殴られた。3人はわれわれの妹なので、匿われた。彼女らは、「もう村人がマオイストを殴ったり、追いかけてくる。もうマオイストにいる意味はない」と考えるようになった。自分たちも村人に殺されるかもしれぬと思うようになった。ダイレク地方でもマオイストと村人との紛争が起こっていた¹⁷。2-4人のマオイストが負傷し、殺された。ここルルク村でも紛争でたくさん死んだという噂だった。しかし、実際は負傷ただけだろう。そうした困難な状況を知って、逃亡し始めたのである。2番目の「母」の娘アイナは、村人が逃がして匿った。Gの妹スルヤ・マヤは、Gの父が逃がした。護ってカラングへ連れて行った。NKの妹マダン、チョウダビスから逃げ出して、

アチャルヤワラの母方の叔父の家に身を置いた。NKの妹は、父親が逃がして、スルケットへ連れて行った。3人はタライへ行った。

わたしは（妹を）逃がさなかった。「おまえはマオイストに行くべきではなかった。行った。もう、そこ（マオイスト）に落ち着け。逃げるな。そのなかに落ち着け。いい仕事をしろ」と言っていた。「名前も残る、未来に。むしろ、われわれの身に降りかかっていた困難¹⁸をよく知っておけ。ハットシジャの人間からわれわれは被害を被った。われわれの穀物や財産は全部、ハットシジャの人間の元へ行った。高利子を取った人間に復讐することができるのなら、逃げるな。」

ビラトVDCのマカリワラ村のTSの妹がマオイストから逃げてきた。パタル・コーラからニルマラとふたりで逃げだしてカラングにたどり着いたら、TSがそれを知った。TSはカラングへ行って、その妹に旅費を与えて、タライの方へ逃がした。わたしの妹だけがカラングに残されてしまった。わたしの妹には旅費がなかった。誰も助けてくれる者がいなかった。

ラハルジャのJAがわたしの妹を郡庁舎で投降させた。わたしの姉がバンドリ・ワラに住んでいた。投降させた後、その姉に預けた。わたしにすぐ知らせが届いた。「おまえの妹が逃げてカラングにいる。今すぐ来い」という知らせがきた。わたしはお金をもってジュムラ・バザールへ行った。他の人に知らせないで郡庁舎へ行き、事情を話した。空港へ行って、切符を買って、妹をネパールガンジへ送り出した。妹に旅費を与えたこと、ネパールガンジに送り出したことがマオイストに知られたら、わたしは村で困ったことになる。そこで隠れて援助した。知っている警察官がいたので、その警察官にお金を渡し、警察官に切符を買ってもらい、妹をネパールガンジへ送り出してもらった。このことは誰にも言ったことはない、今まで。

わたしの妹は、コールプールでもうひとりの妹と一緒に住んだ。のち、ジュムラ出身の青年と結婚した。2-3ヶ月は一緒に住んだ。気に入らなかったのだろう、離婚した。離れたことはわたしは知らなかった。今、ランバプールの青年と再婚している。今、彼女はランバプールにいる。その青年はボンベイで仕事をしている。

のちにわたしはマオイストに殴られたが、それは妹が降伏したからではない。

妹はデハルパタ村のカルカの息子と結婚していた。アイナも、バクタワラ村で結婚していた。結婚だけして、実家に住んでいた。妹が小さいときに、母がなく

なった。父、わたしの妻、弟、妹と住んでいた。

妹たちはアサール月にマオイストに行った。カルティック月に村人とマオイストとが喧嘩になった。マンシル月に投降した。その3-4ヶ月間、わたしは妹に時々会った。マダン、スルヤ・マヤ、アイナは逃がして連れてこられた。わたしは妹を逃がそうとはしなかった。(むしろ)マオイストになっていい仕事をしろと言った。結局は、みんなが逃げ出したので、ニルマラもひとりに残るのが嫌になったのだろう。

マオイストになって、村むらに行って、どこかプログラムがあれば、村人に知らせ、誘って連れていく。広報をする。彼女たちの仕事はそんなものだった。学校で学んでいるわけではないので、知識はない。行つたばかりで、ほかになにもできなかった。

わたしの妹ニルマラは3年生まで学んだ。マダンは8年生まで学んだ。アイナは、まったく学校へは行ってはいない、ゼロ。スルヤ・マヤは3-4年生、それくらいであろう。一番年取っているのが、マダンで、その次がアイナ。その次がニルマラ。その次がスルヤ・マヤ。みな同じ年である(1-2歳の違いはあるかもしれない)。マダンがほかの者を連れて行ったのである。

6. 比較事例

娘たちがマオイストになろうとした動機は、主体的にみえる一方、従属的でもある。マダンは出奔する朝、「国のために命を捧げる」という置手紙を残していた。一方、スルヤ・マヤは「われわれは他の家へいくジャット。父や兄が殺されるよりは(自分たちがマオイストになろう)」と考え、「(マオイストがくれた)ビスケットとダンスが魅力」的に思えた。また、アイナは、皆が行くのであれば、自分も行っても問題ないと考えたようである。

これら4人の娘たちとは異なった事情でマオイストにならざるを得なかった女性もいる。それは、男たちがマオイストから避難して逃げ出したあと、家に取り残された女性である。この場合、当該の男性の妻や娘は同伴して避難するケースが多く、残されるのは、息子の嫁という弱い立場の女性である。次に述べるのは、隣村ラハルジャで実際に起こった事例である。語り手は、ラハルジャ村の老女である。ハットシジャでも家族が避難した後、嫁が食料もないまま残されてマオイストに妊娠させられるという悲劇が起きている。

(ネパール・ kongress 党員の)JAには3人の息

子がある。長男には1男、2女の子がいる。次男の妻アラカ(仮名)がマオイストの党へ行った。三番目の息子には嫁としてスルヤ・マヤを乞うていたが、彼女は結婚をしないで、党へ行った。党へ行って、投降し、党を辞めた。

ひとつは、JAの過ちでもある。すべての家族は避難してコールプールに住む。次男の嫁だけ家に住まわせる。(実際には)長男の嫁と次男の嫁の二人がここに住んでいた。長男の嫁には子供がいたので、マオイストは何もしなかった。マオイストはアラカを誘拐し、殴打した。アラカはなるべくマオイストに行くまいとした。逃げ出してコールプールへ行って助けを求めた。舅のJAは、自分の意思がなければ、誰も党には入れはしない、ジウムラに戻って、田を耕して食べろ、というようなことを言った。二男の嫁はコールプールからまたジウムラに戻ったが、何度も逃げ出してマイティ(実家)に行った。どこに隠れても、どこに逃げても、マオイストたちは探して連れてきて、蹴ったり、殴ったり、苦しみを与えた。ある夕方拉致して連れていき、必ず党に入れと言った。その翌日、われわれの村の学校で、大きなプログラムがあった。そのプログラムで、ひとりの大人物がわれわれの党に入ることになったとマオイストたちが発表した。それがアラカである。

わたしはマオイストが彼女を誘拐したというのは知っていた。しかし、党に行ったというのは知らなかった。村の女と一緒に学校での会合に行つて初めて知った。そのとき、次男の嫁アラカはマオイストに行くのに満足していなかった。泣いたり、叫んだりしながら、「わたしは行かない」と言っていた。喜んでなったわけではない。その後、彼女は党の仕事をした。彼女は党に入った後、村にも来た。村に泊まる。食べる。村に来て、かつての親類(ナタ)つきあひをする。わたしのことを義理の母さんと言う。彼女の実家は、われわれの(ジャジマニ関係にある)プロヒット(祭司)である。

アラカの夫は、「わたしはお前が浄だ(性的に穢れていない)と信じる」と言った。「マオイストから、お前、逃げて来い」と言った。「降伏してくれば、わたしは引き取る」と彼は言ったが、アラカをマオイストが放さなかった。彼女は逃げ出すことが出来なかった。夫は手紙を書いた。彼女は村むらや家いえに泊まったり、食べたりして、のちに他人の子を宿したということだ。われわれは直接見たわけではない。のち、カラングで郡行政長官に降伏し、マオイストの夫からも

離縁されて、他の人のもとへ嫁いだ。喜んで党へ行ったわけではない。

兄嫁の大きな子は、おじいさんのもとに、つまりコールプールにいた。小さい子だけ（ジムラに）残していた。アラカには子供がいないから、マオイストが来るようにと言ったのである。昨今、わたしに会うと、彼女はわたしの足に頭をつけてあいさつし、泣く。もし二人の嫁を家に置かなければ、マオイストはJAの田を全部自分たちで作付けしてしまっただろう。田に自分で作付けするため、JAは嫁を住ませたのである。そのおかげでマオイストは田を取りあげることが出来なかった、家に人がいたので。ふつうは家の中の炭も残さず取ってしまうところ、マオイストは何もしなかった。のちに略奪されたほかの家は、窓、戸、部屋、すべて破壊された。

JAの考えでは、男の子を家に置くと、マオイストに連れていくが、女であれば連れていかれない。ひとりの息子はフムラにいる。給与を貰う仕事をしている。アラカの夫も給与を貰う。だからここに来なかった。田を取られないために二人の嫁を家に置いたのである。

ルルク村の娘たちは勧誘されてマオイストになったと思われる。しかし、自ら決意してマオイストになったケースもある。ここに取り上げるのは、ジムラ郡の隣、フムラ郡のスリナガルVDCの娘の事例である。2006年夏、ネパールガンジにて、当該の娘の父親とインタビューした。事件は5年前と言及されているので、2001年、ルルク村のケースとほぼ同じ時期に起ったと思われる。

娘が死んで、5年になるだろう。最初にフムラの郡庁所在地の人間がマオイストになった。その後、郡庁所在地より下流地域の人間が、そのまた下流地域の人間になった。（わたしの家では）娘が行き、その後息子が行った。その後他の者も行った。

娘の家での名前はD、党での名前はサリタである。年齢は15、16歳であった。健康で太っており、背は低かった。自分の意思で行ったのである。ここでマオイスト党関係者が聞いていないからと言って、（強制されたなどと）嘘を言う必要はない。

村で（マオイストは）他の人には大会へ行くことを強制したり、他の作業なども強制した。しかし、わたしにはそんなことをしたことがない。娘がマオイストになったからであろう。娘は自分から行ったのである。

しかし、わたしは同意したわけではない。娘の母は病気があった。主食のロティをつくるのは娘の仕事だった。糊を搗いて精米するのは娘の仕事だった。

わたしは（娘がマオイストになったのではと）気づいて、娘を見るたび立腹した。娘は6ヶ月ほど家にも帰らなかった。なぜなら、父のわたしが怒るから。われわれの学校にひとを集めて、マオイストの大きなプログラムがあった。そのとき、プログラムを見るために行かなければならないと、行かされた。娘はそこに来ていた。そっとわたしのほうを伺うが、見て見ぬふりをしていた。マオイストに行っても、わたしにはいとおしかった、自分の娘だから。食事に米飯を食べているだろうか、お金はあるだろうか、心配した。そのときわたしの手元にはお金はなかったので、他の人に借りて（娘に）渡そうとした。しかし、わたしに会いに来なかった。娘にわたしてくれるようお金を預けた人に、家に来るようにと伝えてくれと頼んだ。娘は4日後家に来た。その頃5、6回、家に来た。わたしは軍には行くなと言いつつ続けた。3、4回不合格となって戻されたと聞いた。「お前は身体が小さい。行ってはならない」と言った。娘はどうしても言うことを聞かなかった。黙って、軍へ行った。

わたしにはふたり妻がいた。娘は最初の妻（ジェティ）から生まれた。息子は二番目の妻（カンチ）から生まれた。息子は17-18歳だった。娘も大きくなった。わたしのふたりの妻は亡くなった。二番目の妻は病気治療のためカトマンドゥウにも連れて行った。ムグの郡庁所在地ガモガディにも連れて行った。ガモガディで亡くなった。最初の妻も、その2年後に亡くなった。ロティを作るのは娘の役目だった。わたしは年をとって、食事を作る気にはなれなかった。

娘はマオイスト人民軍のディヴィジョン(Division)に行ってしまった。ディヴィジョンに行ったら、よいと言っていた。食住が良くなった、と。どの地に連れて行かれたか、われわれは知らなかった。カトマンドゥウなのか、どこなのか、知らなかった。カルティク月、マンシル月にはタラ(イ)のあたりだったのだろう。のち、バドゥ月(8-9月)にニュース(ガタナ)が来た。死亡したのはおまえの娘だという知らせが届いた。しかし、バドゥ月には死んでいなかった。知らせは嘘だった。のち、プス月(12-1月)に、ニュースがきた。わたしの心の内では娘は死んでいないと思った。それらは全部、風の便りである。死んだと言われたあとで、娘はダサインに家に会いに帰ってきた。

わたしの家にはひとりの嫁がいる。女が生理になる

と家の外に住む習慣がある。古い、無知の習慣であれ、何であれ。ダリットを分離する慣習もある。強制的にダリットが食べさせるならわたしは食べるが、自分からすすんで食べはしない。「お父さんはなぜそんなことをするのか。兄嫁が不浄のとき外に置いてるとマオイストが知ったら、罰（サラム・カイト）を与える」と、娘はわたしを少し諭した。家に寄り、食事をした。

「自分に軽食（アルニ）を作ってくれ。わたしはタライに行く。マオイストは少しお金をくれる。歯磨き、石鹸、敷くもの、ブラウス、靴、靴下、布もある」と娘は言った。わたしは「出来るだけおまえは行くな。マオイストを何としてでも説得しよう。手を合わせましょう」と娘に言った。「スリナガル村のような田舎ではない。おまえは、国軍や警察のパトロールと出会ったことがない」とも諭した。「タライに行ったら、食べる、泊まる、歩く、すべて用心なさい」と言った。「わたしは行きません。行かなかったら、マオイストは罰（サラム・カイト）をする」と娘が言った。「いつかは死ななければならない」とも言った。この娘は死ぬにちがいないとわたしは思った。

その後、娘はカリコット郡、ロルパ郡、ルクム郡のどこへ行ったのか。マンシル月、娘から手紙がきた。「われわれはキャンペーンに行く。わたしのことを心配しないでください。生きていたら、2年後にお会いしましょう。死んだら、それだけ」と書いてあった。

その手紙を見たとき、悟った。読むだけで泣きそうになった。娘は死ぬにちがいないと思って。(男のわたしは)女性のように泣くことは出来ない。その2、4日後、娘が死んだという知らせが届いた。あるマオイストが自分の妻に宛てた手紙で、サリタというのが死んだと書いていた。息子が、われわれのDは死んでしまったという。どこから知ったのか、手紙を出したひとの家へ行った。「はい、死んだのは本当です」と言われた。ロルパのカダという地で国軍のナイトビジョンが殺したという。死ぬときも、わたしの娘は、正々堂々と死んでいった。国軍のヘリコプターが来て、マオイストに「家の中にはいれ」と言われ、他の者は中に入ったが、娘は外に立ちつくした。プラチャンダの命令が何か、われわれは知らない。キャンペーンに行くとき、マオイストは赤い服を着る。赤い服を着ているのはマオイストであると、国軍は撃ってくる。

われわれは喪に服した、死んだということを知って。娘の葬儀（クリヤ）もしていない。マオイストもクリヤをすることを許さない。マオイストは、もとVDCの役所にわたしを呼びだした。サルダン・ジャリ（遺

影に花輪やシンドゥールをつける）をしなくてはならないと言う。サルダン・ジャリをして2、4カ月後、赤い印字で書かれた手紙が届いた。死亡通知であった。10-12日後、またそのような手紙が来た。死んだという手紙は結局3回来た。

7. 考察

マオイストたちは国家権力と闘う一方、村落の伝統的な支配勢力を、封建的搾取者と呼んで、敵視し、攻撃した。当該の娘たちのうちふたりは、マオイストによって「封建的搾取者」とラベルされる者の娘であった。マオイストにとって娘たちはリクルートの対象というより、敵である封建的勢力と闘うための道具であったのだろうか。勧誘された娘たちは親の身代わり、もしくは親の威信を傷つけるために選ばれたのであろうか。

ネパール共産党毛沢東派による武装闘争は、2001年には村むらに人民政府の樹立をもたらした。マオイストという反国家的集団が村落共同体を支配するようになったのである。女性は共同体の中だけで生きてきたわけではない。しかし、人々はマオイストのような集団にはいまだかつて遭遇したことはなかった。マオイストのリクルート戦略については不明ながら、若者にながしかの影響を与えたのは確かである。3年後の2004年に展開されたキャンペーン、シュズ・カス・アビヤンについては多くの証言を得ている。それは集団的避難をひきおこすほど強制的なものであった。

KNに唆されてマオイストになったという語りは、親も村人も納得する語りである。村の外からやって来た部外者に「唆された」、世間知らずの娘たちは同情に値する。「唆された」という語は娘たちの投降の際にも用いられた。「自分の意思でマオイストになろうとしたわけではない」と。娘達は誰がKNと謀ったかについては、異なる説明をする。それは時間の経過や、投降後に強いられた生活—マオイストの報復を避けるために村を出ざるを得なかった—に由来するものもあるが、たくみに主体であったことを避けようとしている。

ジウムラの古い習慣に従って、スルヤ・マヤが小さいときに、父親Iは、ラハルジャ村のJAの息子に与えていた。彼女がマオイストになったので、JAは息子と結婚させる必要はなくなった。同様に、マダンも、かつての習慣に従って、ダバVDCのディグラ村に与えられていた。ディグラ村の人間も、結婚する必要はなくなった。彼女がマオイストになったので。今、ス

ルヤ・マヤとマダンは、それぞれ、かつての婚約者とは異なる人と結婚してくらしている。子供もいる。

同様に、アイナもパンダップグファVDCのバクタワラ村に与えられていた。後、コールプールに住んで、タルと結婚している。バクタワラの間人との結婚は解消された。同様に、古い習慣に従って、ニルマラも、パンダップグファVDCのデハルパタ村に与えられていた。そこでも結婚を継続する必要はなくなった。マオイストに行ったので。いま、別の人間と結婚している。

娘たちは投降後、結婚というかたちで新しい生活を手に入れた。一見、女性の伝統的な生き方にしたがっているように見えるが、かつての共同体的規範がもたらす相手とは異なる人物との婚姻である。彼女たちは「親に従順な娘」という伝統的な価値のエージェント (Skinner 他：1998) のまま、「唆されて」マオイストとなり、投降によってかつての価値に復帰したのだろうか。一時期であれ、国家のために死ぬといった娘はどこにいったのか、あらためて問われなければならないだろう。

註

- 1 調査結果は、安野 (2000) 参照。
- 2 Hachhethu (2002) など参照。
- 3 マオイスト運動はまず、男女を問わず下位カーストに浸透し、下位カーストから黨員になる者が顕著であった。また一方で、当時、村内に「離婚」されてマオイストになった女性がいて、もとの夫に財産を請求するためマオイストになったとみられ、蔑視されていた。
- 4 2002年初頭、これら女性マオイスト3人は国軍に見つかり、射殺された。
- 5 西ネパールの村人がどのように避難民となったかの概略については、安野 (2008c) 参照。
- 6 投降とは、政府に恭順の意を示し、悔悛して政府の庇護を求めることである。
- 7 Jana MorchyaはもともとCPN-Mに近い政党であった。
- 8 マオイストによる地方名望家への襲撃については、安野 (2007) 参照。
- 9 全国各地の警察詰め所を撤収して郡庁所在地に集結したのは、 kongress 政権の政策であった。
- 10 名前が挙げられた青年4名は、マオイストにはならなかった。
- 11 ネレッシュ・バンダリは、2008年4月10日に実施された制憲議会選挙において、ジウムラ小選挙区から立候補し、最高得票数を得て、当選した。安野 (2008b) 参照。
- 12 すでに述べたように、全員が未婚だったわけではなく、2人はすでに結婚していた。
- 13 前述のインタビュー (1年前に行われた) では、サウン月に出奔したと述べている。
- 14 マオイストの党首。
- 15 前述のインタビュー (1年前) では、アソジ月と述べている。
- 16 実際には、殺されたマオイストはひとりで、あとひとり気は失うほど重傷を負ったといわれる。
- 17 この事件については、ネパールの人類学者S.Shah (2008) が調査している。
- 18 Nの父がハットシジャの高利貸しから借金をし、返済できなかったため、土地を取りあげられたことを指している。

文献

- Comrade Parvati 2003. 'Women's Participation in the People's War', in Karki, Arjun & David Seddon (ed), *The People's War in Nepal: Left Perspectives*. Delhi: Adroit Publishers
- Dahal, Puspa Kamal (Prachanda) 2003. 'Inside the Revolution in Nepal', in Karki, Arjun & David Seddon (ed), *The People's War in Nepal: Left Perspectives*. Delhi: Adroit Publishers.
- Gautam, Shobha, Amrita Banskota and Rita Manchanda 2003. 'Where There Are no Men: Women in the Maoist Insurgency in Nepal', in Deepak Thapa (ed), *Understanding the Maoist Movement of Nepal*. Kathmandu: Martin Chautari.
- Hachhethu, Krishna 2002. *Party Building in Nepal: Organization, Leadership and People*. Kathmandu: Mandala Book Point.
- Karki, Arjun & David Seddon 2003. 'The People's War in Historical Context', in Karki, Arjun & David Seddon (ed), *The People's War in Nepal: Left Perspectives*. Delhi: Adroit Publishers.
- Ogura, Kiyoko 2008. 'Maoist People's Governments, 2001-05', in David N. Gellner & Krishna Hachhethu (eds), *Local Democracy in South Asia: Microprocesses of Democratization in Nepal and its Neighbours*. New Delhi: Sage.
- Onest, Li 2006. 'Women Hold Up Half the Sky!: At the roof of the world, some of the most oppressed woman on the planet are fighting for radical new solutions' in Vishwakarma, P.K. (ed) *People's Power in Nepal*. New Delhi: Manak.
- Sapkota, Dipak 2006. 'Women Fighting for a New Nepal' in Vishwakarma, P.K. (ed) *People's Power in Nepal*. New Delhi: Manak.
- Shakya, Sujita 2003. 'The Maoist Movement in Nepal: An Analysis from the Women's Perspective', in Karki, Arjun & David Seddon (ed), *The People's War in Nepal: Left Perspectives*. Delhi: Adroit Publishers.
- Shah, Saubhagya 2008. Revolution and Reaction in the Himalayas: cultural resistance and the Maoist "new regime" in Western Nepal. *American Ethnologist*, vol.35, no.3, pp481-499.
- Sharma, Mandira and Dinesh Prasain 2004. 'Gender Dimensions of the People's War', in Michael Hutt (ed), *Himalayan 'People's War': Nepal's Maoist Rebellion*.

Hurst & Company, London.

Skinner, Debra and Dorothy Holland 1998. 'Contested Selves, Contested Feminities: Selves and Society in Process', in Skinner, D., Alfred Pach III, and Dorothy Holland (eds), *Selves in Time and Place: Identities, Experience, and History in Nepal*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

小倉 清子 2007 『ネパール王制解体 国王と民衆の確執が生んだマオイスト』日本放送協会

安野 早己 2000 『西ネパールの憑依カルト ポピュラーヒンドゥイズムにおける不幸と紛

争』勁草書房

安野 早己 2007 「ガル・ルトネ (ghar lutne) : 家財の略奪 - ネパール・マオイストによる地方名望家への襲撃 -」『山口県立大学大学院論集』第8号

安野 早己 2008a 「石と弾丸: 村人がマオイストに立ち向かった日」日本文化人類学会発表

安野 早己 2008b 「ネパール制憲議会選挙とその後」日本南アジア学会第21年全国大会発表

安野 早己 2008c 「西ネパールの村落社会からみる人民戦争」『民博通信』No.122